

「主宰の言葉より」その2―あはれの表現者②―

今瀬 一博

前回この稿では、これまで主宰が様々な機会に述べてきた俳句の「あはれ」について、句への読み込み方に基づいて考えてきましたが、今回はその「あはれ」の具体的な表現の仕方について、「切れ」の効果に着目しながら、考えてみます。

俳文学者の山下一海氏は、俳句の「切れ」に関して、「切れは一句における詠嘆の強さと、表現の確信を表している。すなわち句は、詠嘆の強さと、表現の確信を持つことが重要であって、形式的な切れの有無にこだわることは、意味の薄いことである。(『現代俳句大辞典』)」と述べています。俳句の「切れ」は形式ではない。強い詠嘆をもたらし一句の表現が動かないことを示すものでなければならぬということです。「切字」を使う場合にも同じことが言えます。切字も「切る」という目的が先に立ち、単に切るための道具として安易に用いると、句が重くなったり古臭くなったりしますので、やはり注意が必要です。

切字として周知されている「や」も「かな」も「けり」も、そもそも皆「詠嘆」「や」は間投助詞、「かな」は終助詞、「けり」は助動詞の気持ちを表す言葉です。「詠嘆」とは、「あはれ」そのものですから、切字を用いた句はこの「あはれ」の心が感じられるように詠まなければなりません。逆に言えば、切字を効果的

に用いれば、読み手の「あはれ」をより確実に読者に感じ取ってもらえます。無論切字を用いてなくても切れている句は有りますし、「あはれ」の気持ちには強弱もあります。ただ、句を切ることの背景には、その言葉を際立たせ読者に投げかける意図があるので、少なくとも山下氏の言うように、一句に詠嘆(あはれ)をもたらし、そのポイントが明確になる表現を伴っていることが、「切れ」の条件になるでしょう。それが伴わなければ、句は重く大げさになります。主宰がよく言われる「言葉で脅かしてはいけない」にも、このような意味が含まれるでしょう。前回この稿で紹介した作品も、多く切字を用いていましたが、改めてその効果を見てみましょう。

- ① 赤蜻蛉筑波に雲もなかりけり 正岡 子規
 - ② 遠山に日の当たりたる枯野哉 高浜 虚子
 - ③ 流れ行く大根の葉の早さかな 高浜 虚子
 - ④ まさをなる空よりしだれぎくらかな 富安 風生
- には、「けり」と「かな」が用いられていましたが、①は「関東の名峰筑波山には雲一つない(秋晴である)ことだなあ」という「あはれ」、②③④は一句一章の句なので何に「あはれ」を感じているかは明白です。表現の面からも、切字の使用によって感動のポイントが明確になっています。切字を使用しないで同じ景を詠んでみると、その効果がよく分かります。一方で、

⑤ 寒晴やあはれ舞妓の背の高き 飯島 晴子

は、「や」を用います。この「や」でしっかり切ることで、中七以降との関係が切断され、響き合いが生まれます。何一つ隠せない眩しさと身を切る寒さを感じる「寒晴」の効果で、しなやかな

挙措や美しい舞を身上とする「舞妓」の、生来の長身の「あはれ」が、実感を伴って読者に響くのです。

ここで一つ心に留めておきたいのが、「や」「かな」「けり」の働きの違いです。例句からもある程度分かるように、「かな」はほとんどの場合句の末尾に置かれ、「けり」は中七の終わるか句の末尾に置かれ、ともに「詠嘆（あはれ）」の気持ちを表しますが、その際この二語は、一句の感動の中心や最も強調したい言葉に付くということ。「かな」「けり」は多くが一句一章の句末に置かれるため、一句全体で一つの感動を表現しているとも言えるのですが、もっと簡潔に言えば、②の句ならば「枯野」、③ならば「早さ」に、作者の感動の中心があります。

⑥冬蜂の死にどころなく歩きけり

村上 鬼城

ならば、「歩く」ことに作者は驚き、「あはれ」を感じています。作句の際、どのように一句の感動の焦点を明確にし、どのように表現を整えるかを考える場合に参考にしてほしいと思います。

これに対して「や」は、多く上五の末尾に用いられ、中七の末尾に置かれたり、稀に句の末尾に置かれます。この言葉の働きは「切る（切断）」ことにあるので、詠嘆（あはれ）の気持ちは根底にあります。が、「かな」「けり」のように一句の感動の中心に付くと言うより「間投助詞」として、付いた言葉の輪郭を鮮明にし聞き手に働きかける効果があります。「や」で切るか、名詞節にして切るかによっても、わずかながら一句に差異が生まれ、結果的にその句全体のニュアンスに影響することもありますので、作句の際には、是非使い分けてほしいと思います。例えば

⑦春風や闕志いだきて丘に立つ

の「春風」は、「春の風」と、名詞節にして切ることもできますが、

「や」を使ったときのような「春風」の輪郭の鮮明さや、詠み手に対する強い働きかけは弱くなります。

一方で「や」は、中七の終わりに置かれることもあります。

⑧ひつばれる糸まつすぐや甲虫

高野 素十

⑨万緑の中や吾子の菌生え初むる

中村草田男

これらの句の「や」は、⑦の句の「春風」の輪郭を鮮明にしたような働きよりは、聞き手に対して強く働きかける効果が主となっていると言えます。⑧ならば「ひつばれる糸まつすぐ」という糸の状態を強く読者に呼びかけて、「あはれ」を共有する働きがあると言えるでしょう。⑨ならば「万緑の中」に、今「吾子」が生きているということ（あはれ）を読者に強く呼びかける効果があります。聞き手に強く働きかける効果のある、「間投助詞」の特性が発揮されていると言えます。

では最後に「切字」を用いない切れの有る句を紹介します。

⑩芋の露連山影を正しうす

飯田 蛇笏

⑪かたつむり甲斐も信濃も雨の中

飯田 龍太

⑩の句も⑪の句も、いわゆる関係のないものを配合する、取り合わせの句ですが、「や」「かな」「けり」を用いていないということは、先程述べてきたこれら三語の特徴が一句の中に入っていないことですので、切字の持つ詠嘆の強さや切れの鋭さ、強い押し出しはありません。ただしその分、言葉同士の純粹な響き合いが生まれます。「切字」はありませんが「切れ」はありますので、山下氏の述べた「詠嘆の強さと、表現の確信」も感じます。このように考えてくると、切字を使う使わないという方法的問題含め、冒頭にも述べた、「切れ」や「切字」を形骸化して用いないということは、作句の際に大切になってくると思います。